

付加疑問文のイントネーション  
—研究と教育への応用—

伊関 敏之\*

Intonation of Tag Question

—An Application of Research and Education—

Toshiyuki ISEKI

Abstract

In this paper, we will examine intonation of tag question.

In that case, we will take English way of thinking and so on into account.

It seems to us that cognitive linguistics has provided very useful insights in almost every field of linguistics.

It says in the theory that “when the form has changed, the meaning has changed, too.”

I think this principle applies to English intonation, as well.

This time, we will focus on the usage of constant-polarity tag question in particular.

Finally, we will state a few problems to be solved in the future.

序論

イントネーションには、いろいろな機能があることが報告されている。伊関（2017, pp.106-39）では、イントネーションの談話機能（特に Brazil の音調理論）に注目して詳述するとともに、この理論の英語教育への適用可能性ということを追究してきた。

今回は、イントネーションについて筆者が過去において発表してきた論考を基にして、さまざまな角度から興味深い問題点を考察していくことにする。付加疑問文については、詳細に検討していく。

要するに、イントネーションの違いがあれば、たとえ話し手の発話内容が同じであっても、聞き手によっては異なった印象を受けるということは当然ありうる。さらに言えば、日本語は英語に比べてイントネーションへの依存度が低い言語であるということがよく言われる。このことは、言語（イントネーション）の普遍性を考える上で大変重要な事実である。

言語の普遍性についての考察は、大変興味深いかつ大きなテーマであるといえる。

---

\*北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

## 1. 形式と意味のずれを考慮した付加疑問文のイントネーション

コミュニケーションをする上で、話し相手にある意味を伝達しようとする時にはいろいろな表現方法がありうる。その際に、話し手は聞き手になるべく理解しやすいような表現を用い、かつ自分の発話意図を誤解されないような表現を用いるように努めるはずである。

文法的に正しい文を的確に用いてコミュニケーションを図ることはもちろん大切なことではあるが、それだけでは十分ではない。文法形式（文構造）を正しく捉えて、その上でイントネーションの基本的な用法に基づいて発音し、相手に有意味な内容を伝えることが、初級の段階では何よりも大切である。最初の英語教育においては、この点について十分な配慮が必要不可欠である。

ただし、それよりさらに研究を進めていくと、この考え方だけでは説明がつかない（不十分である）こともまた事実である。

日常会話で実際に使われる場面（現実的なコンテキスト）を考慮に入れようとするれば、語用論的観点からの考察がどうしても必要となってくるということは言うまでもない。

本章では、そのような観点に立って、付加疑問文という文の形式とそれらの文が実際に表す意味、さらにその際に用いられるイントネーションに焦点を当てていろいろと考察していきたい。

### 1. 1 付加疑問文とイントネーション

英語には付加疑問文という文法形式があり、大変興味深い。  
基本形は、次の2種類。

#### ① 肯定形の平叙文＋否定形の付加疑問

（反転極性付加疑問文） **reverse-polarity tag question**

(a) 「～ですね」 [下げ調子]

You are a student, aren't you? (↘)

(b) 「～なのでしょう？」 [上げ調子]

You are a student, aren't you? (↗)

(a) の音調は「あなたは学生ですね」と念を押す気持、(b) の音調は、**念を押すと同時に質問の気持が加わって**「あなたは学生なのでしょう？」ときく場合。

ただし、この区別はあくまで原則的なもので、実際にはあまり意味には差がない。日本語でも、同じ「ね」を言う場合、下げ調子の「～ですね」と上げ調子の「ですね」では表す気持に少し差があるのと同様である。

—安田 1970, pp.136-7

#### ② 否定形の平叙文＋肯定形の付加疑問

（反転極性付加疑問文） **reverse-polarity tag question**

(a) 「～ではないですね」 [下げ調子]

You aren't a student, are you? (↘)

(b) 「～ではないのでしょうか？」 [上げ調子]

You aren't a student, are you? (↗)

これも上述①と同様の説明が当てはまる。

多くの参考書に書かれているところによると、上昇調で発音される場合には、「質問の気持+yes か no で答える必要あり」というのが代表的な解釈である。これでは以下に説明

するように、普通の Yes - No Question との違いがわからないのである。その点、上述の安田（1970）の説明にあるように、「念を押すと同時に質問の気持が加わる」というものは、説明の仕方としては、とても理にかなっていると言える。つまり、① (a) の場合には、初めから話し手は Yes or No の返答を期待してはおらず、当然 Yes の返答になるものと思っ

ているのである。

ところが、① (b) の場合には、Yes or No の返答を求めていることになる。そうすると、「あなたは学生ですか？」と普通に尋ねる疑問文とはどのように違うのであろうか？この場合には、当然 Are you a student? となるであろう（上昇調で言えば、You are a student? ももちろん可能である）。このような普通の Yes - No Question との用法上・意味上の違いを説明するのが、中級の英語教育では大切である。

要するに、Are you a student? の場合には、話し手は聞き手に対して全く純粋に（つまり、白紙の状態で中立的に）「あなたは学生ですか？」と尋ねているのである。相手の答えが Yes になるか No になるかは全くわからない fifty-fifty の状態なのである。

一方、付加疑問文を上昇調で言った場合の① (b) の場合には、付加疑問文を下降調で言った時のように確信はないものの、（ある程度）相手が学生であることに自信がある時に使われるものである。（確か学生であったと思うけれども）「あなたは学生なんでしょう？」という気持で使われるということである。

つまり、全くの中立的な立場ではなく、初めから肯定の方向に気持が傾いた表現であるということである。これが② (b) のような付加疑問文では、「あなたは学生ではないんでしょう？」と当然最初から否定の方向に気持が傾いた表現となる。

図1 付加疑問文の立ち位置



私見では、上のような図を想定し、付加疑問文の立ち位置を示してみようとしてみた。

少しわかりにくいので、説明を補足しておく。中立的な Yes - No Question に対して、付加疑問文は下降調で使われると、一番右側の確信がある●の位置にあるものと思われる。一方、上昇調で使われると、疑問の意味が加わるのであるから、中立的な●と確信がある●の中間的な位置になる。つまり、上昇調を使ったからといって、完全に中立的な位置まで戻るのではなく、その中間くらいまで戻るという仮説である。まだ半分は肯定および否定の気持が中立的よりは強いということである。

付加疑問文を下降調で言えば、「～ですね」という気持を付け加えかつ断定の音調なので、当然確信がある●に位置することになる。

一方、付加疑問文を上昇調で言えば、確信がある（断定的）な位置からは離れて、確信がない方向に移動するが、Yes - No Question が表すような中立的な位置まで移動するのではなく、あくまでも確信がある領域内にとどまっているということである。

これはどうしてかという、付加疑問文という文法形式がそのような意味を導いているということである。要するに、「～なんでしょう」という意味を付け加える文法形式であると



## 2. 1 「語用論的幅」とイントネーション（実証的データ）

### 2. 1. 1 上昇調のイントネーション

なお、以下の例（実証的データ）において、[普]というのは、付加疑問文における普通の用法のこと。一方、[幅]というのは、「語用論的幅」があるということである。例えば、意味論的観点からすると、(♯)は(↘)に限りなく近づいており、(↘)は(♯)に限りなく近づいているということである。

- (1) A: **It's a terrific day for a picnic, isn't it?** (♯) [幅]  
 B: Yeah, I'm so glad it isn't too hot.
- (2) A: **The people here are so nice, aren't they?** (♯) [普]  
 B: Yes, they are. They're really friendly.
- (3) A: **The play starts at 8:00, doesn't it?** (♯) [普]  
 B: It starts at 7:00, actually.  
 A: Oh, no. We'd better hurry or we'll be late.
- (4) A: **You also work, don't you?** (♯) [普]  
 B: Yeah. School is expensive, so I have to have a job. I work in the library. When it is quiet, I can study.  
 A: Oh, that's good.
- (5) A: **You're looking for a new pair of boots, aren't you?** (♯) [普]  
 B: I'm not sure. My old ones are so comfortable.

#### [解説]

(1) について—Aが「ピクニックにはいい日だよな？」と言っているのに対して、Bは「そうだね。あまり暑くなくて嬉しいよ。」と答えている。このAのセリフは[幅]として筆者は捉えている。例えば、*It's fine today, isn't it?*のような付加疑問文は、通常いい天気であれば何の疑いもないので、(↘)が普通の使い方であると言える。ところが、この場面で(♯)を使用するということは、[幅]と考えるのが妥当であろうと思われる。

ただし、意味論的観点からすると、(♯)は(↘)に限りなく近づくことがありうるので、(♯)を用いたとしても何ら不思議ではない。筆者の今までの考え方では、当然この場面では(↘)が普通の使い方だと思っていたので、大変斬新な考え方に触れたような気がする。

### 2. 1. 2 下降調のイントネーション

- (1) A: **That's a great song, isn't it?** (↘) [幅]  
 B: I really like it even though I can't remember all of the words.
- (2) A: **It's really rainy today, isn't it?** (↘) [普]  
 B: Yeah, I'm going to study. How about you?  
*Tune in 1—Learning English Through Listening pp.42-53*
- (3) ●お母さんがビリーに声をかけます。  
 Mom: Did you finish your homework, Billy?  
 Billy: Not yet. I'm getting hungry, Mom. What's for dinner?  
 Mom: Pork curry and rice. It's your favorite. But first you have to finish your homework.

Billy: I can't wait that long! It will take another two or three hours to finish it.

Mom: **Well, then you'll be *really* hungry at dinner, won't you?** (ㇷ) [幅]

(あら、だったら夕食のときは、十分におなかがすいているんじゃないかしら?)

—2018 NHKラジオ英会話4月号 pp.54-5

【解説】

(3) について一子どもが夕食を待っている場面。お母さんが子どもに声をかけます。「宿題を終えたら、ごはんが食べられますよ。」と。しかし、子どもは「終わるのにあと2～3時間かかるから、もう待てないよ。」と言っています。それに対してのお母さんのセリフがここでのポイントとなる [幅] の表現です。「あら、だったら夕食のときは、十分におなかがすいているんじゃないかしら?」というもの。たぶん、そうだとは思いつつも、相手(子ども)の気持を推測する場面であるので、普通であれば (ㇸ) の方が適切であるように思われる。にもかかわらず、(ㇷ) が用いられているということは、それだけお母さんは自分の息子の心の内をお見通しであるということであろう。ここでも [幅] を十分に活用したイントネーションとなっている。大変興味深いことである。

2. 1. 3 データの追加

(1) A: **You're not going to fire Helen, are you?** (ㇸ) [幅]

ヘレンをクビにするつもりはないよね?

B: Of course not.

もちろん(そのつもりはないよ)。

(2) Hey, look at this computer. **It's really stylish, isn't it?** (ㇷ) [幅]

ねえ、このパソコン見てごらんよ。本当にカッコよくない?

付加疑問文。軽い疑問・念押し。☞「軽い疑問」と「念押し」では意味合いが違う。

(2) Tomoko: Hi, Ryota. Have you talked with our new colleague, Manabu?

こんにちは、リョウタ。私たちの新しい同僚のマナブともう話をしたかしら?

Ryota: Not yet, but I saw him this morning. **He looks very professional, doesn't he?** (ㇷ) [普]

いや、まだだけど、今朝、彼を見かけたよ。彼はとても仕事ができそうにみえるよね。

付加疑問文です。軽い疑問や同意を求めるキモチで使われます

☞「軽い疑問」と「同意を求めるキモチ」では意味合いが違う。

(4) Ben: Is that a Mexican restaurant?

それはメキシコ料理店?

Keiko: Yes, this is the best restaurant in town. One of my American friends took me there.

そう、これは町でいちばんのレストランよ。私のアメリカ人の友達がそこに連れて行ってくれたの。

Ben: **And that's a burrito, isn't it?** (ㇸ) [幅]

It looks really good.

そして、それはブリトーだよ。とてもおいしそう。

—2018 NHKラジオ英会話9月号 p.37, p.68, pp.74-5, pp.78-9

### 【解説】

(2) について—パソコンに関して、「本当にかっこよくない？」と相手に聞いている。パソコンがかっこいいかどうかということについては、人によってさまざまであり、何とも言えないような状況である。その時においてさえも、(v) を用いているということは、まさに [幅] の表現であると言えよう。つまり、この場面では、(v) は (r) に限りなく近づいているということを表している証左となるであろうと思われる。そのように考えないと、現実的なコミュニケーションの場面における付加疑問文のイントネーションに対する合理的な説明がなされないのである。

(4) について—これも [幅] の考え方を適用すると、非常にうまく説明がつく。料理を見ながらのコメントである。「そして、それはブリトーだね？」とある。見ればすぐにわかるということであれば、(v) を使うことももちろん可能である。また、ここでのイントネーションの使用を「見ればわかる+ほんの一抹の不安」のような感情であると捉えれば、(r) の使用ももちろん可能である（私見）。いずれにせよ、[幅] の考え方を適用すれば、(r) と (v) のどちらを用いても極自然であるということになり、全く違和感がない。つまり、意味論的に見て、両者は限りなく近づいているからである。ほぼ同じであると言ってもよい。ただし、「形が変われば、意味が変わる」という認知言語学的な考え方を適用すると、それでも全く同じであるとは言えないのである。「それはブリトーだね？」を上昇調 (r) で言っているということは、「見ればわかる (v)」に「ほんの一抹の不安 (r)」と考えれば、全く同じであるとは言えなくなるのである。大変理に適った説明であると言えよう。

### 3. NHKラジオ英会話の考え方と説明

上述の説明の中で、5箇所においてNHKラジオ講座において用いられていた例が出ていた(2. 1. 2の(3)と2. 1. 3(1)~(4))。

中でも、例えば、2. 1. 3の(3)において、「付加疑問文です。軽い疑問や同意を求めるキモチで使われます。」と書かれている箇所がある。それに対して、筆者は「軽い疑問」と「同意を求めるキモチ」では意味合いが違っているとコメントしておいた。この点については、後程詳しく言及することにする。その前に、NHKラジオ英会話について簡単に触れておきたい。

筆者は、NHKラジオ英会話の大ファン (a big fan) であり、毎回欠かさずに聴いている (まさに、listen である)。その講座の中から興味深い例をいくつかピックアップしてきて、詳細に検討していくことにする。

この講座では、日本人の講師一人とイギリス人 (男性) とアメリカ人 (女性) のネイティブスピーカーの講師が一人ずつの合計三人で英語を教えている。

同じネイティブスピーカーの英語であっても、イギリス英語とアメリカ英語では音声面において全く趣が異なっているので、発音に興味がある学習者にとっては、大変有意義な番組となっている。

その上さらに、ネイティブスピーカーの発想を重視した英文法の説明がとても斬新かつ新鮮であり、リスナー (listener) の心 (気持) を放さない魅力がある。どんなに忙しくても、ほぼ毎日15分は必ず英語に触れる機会を持つことができるので、英語の勉強を習慣化する

上でも恰好の教材である。まさに、「継続は力なり」(Practice makes perfect.)である。

さらに、理想を言えば、この講座は数あるNHKラジオ英語番組の中では中間的なレベルにある講座であるので、この講座とほぼ同じ構成内容の講座がもっと幅広くあれば有難いということである。

レベル設定に関しては、A0・A1・A2・B1・B2・C1・C2の7段階が設定されており、この講座はちょうど中間のB1レベルである(A0からC2に向かって、易から難へと移行するということである)。

私見では、英検2級を目指す学習者にとって最適な講座であるという印象であるが、利用の仕方によっては、英検準1級および1級の学習者にとっても役立つようになっている。

いわゆる英語の4技能のうち、リーディング(reading)とリスニング(listening)の分野では、多少物足りないという感じは否めないが、スピーキング(speaking)とライティング(writing)の分野においては、この講座でしっかりと勉強すれば十分であると思っている。

つまり、4技能の中でも能動的かつactiveな活動である。コミュニケーションの場面において、自分から自らの意思を積極的に発信していく際にはとても有効であるということである。

一方、4技能の中でも受動的かつ受動的な活動であるreadingとlisteningに関しては、他の教材も積極的に取り入れて取り組む必要があるであろう。

従って、先程述べたようなこの講座とほぼ同じ趣旨で構成されているC1・C2レベルの講座の開講が待たれるところである。もしそのような講座が開講されたならば、英検準1級および1級対策にも大変有効となるであろう。

以上、筆者が日頃聴いているNHKラジオ英会話の良い点(merit)について概観してきた。

これからは、そこで使われている付加疑問文についての説明およびネイティブスピーカーの音声データに基づいて、興味深い例をアカデミックに深く掘り下げて考察していくことにする。

### 3. 1 NHKテキストに基づいた説明

ごく最近のテキストの中から、興味深い付加疑問文の例を挙げてみることにする。

全体像を正しく把握するために、Lesson 164 で取り上げられていた本文をそのまま引用して、内容を確認し、その際においてなされていた文法の説明のうち、付加疑問文に関する部分をそのまま掲載することにする。その後、私見を交えながら、詳細に検討していくことにする。

#### 3. 1. 1 付加疑問文に対するネイティブスピーカーの感覚

■明日のテストのための準備が終わったかどうか母親に尋ねられたヴィニー。もうほとんど終えてしまったことを伝えます。全部終えたらおいしいデザートが待っているですよ。

Mom: Vinny, have you finished all the preparation for tomorrow's test yet?

Vinny: No, not yet.



Mom: **But it's a really important test, isn't it?** You don't have time to play video games.

Vinny: Don't worry, Mom. I've finished most of it already.  
I'm taking a break.

Mom: Well, if you get it all done soon, I'll give you a special treat.

Vinny: What kind of treat?

Mom: Home-made cream puffs, your favorite dessert.

Vinny: OK, Mom. I'll get back to work right away.

日本語訳例

母親： ヴィニー、明日のテストのための準備はもう全部終わったの？

ヴィニー： いや、まだだよ。

母親： **でもとっても重要なテストなのよね？** ビデオゲームなんかしている時間はないわ。

ヴィニー： 心配なくていいよ、母さん。 僕はもうほとんど終えたから。 今は休憩しているんだ。

母親： じゃあ、すぐに終えたら特別なごほうびをあげるわ。

ヴィニー： どんなごほうび？

母親： 手作りのシュークリーム。 あなたのお気に入りのデザートよ。

ヴィニー： わかったよ、母さん。 すぐに勉強に戻るよ。

#### CHECK YOUR GRAMMAR!

(文法のポイントを確認しましょう)

#### ◎付加疑問文

##### **But it's a really important test, isn't it?**

でもそれは本当に重要なテストなのでしょう？

文末に **isn't it?** がついていますね。文に軽い疑問・念押し of 気持ちを添える付加疑問文です。

作り方は単純、メインの文が肯定文ならコンマのあとに否定疑問を、否定文なら肯定疑問を軽く添えます。付加疑問文がこのようにいわばプラスとマイナスを逆転させるのは、肯定と否定をどちらも提示して「～ですよ、それともそうじゃない？」と相手に選ばせるから。相手に選ばせるーそこに軽い疑問や念押し of 気持ちが宿るのです。

##### **It's a really important test, isn't it?**

肯定文 (+) → 否定疑問文 (-)

—2019 NHKラジオ英会話12月号 pp.26-7

大変興味深い説明である。従来の参考書や研究書とは全く異なった視点からの説明が、上述の太字と下線部の部分においてなされている。確かに、手元にある英文法の問題集を紐解いてみると、次のような例が見られる。

**I don't know whether she is married or not.**

(私は彼女が結婚しているかどうか知らない。)

—佐藤 2006, p.39

この文も正確に英文解釈をすれば、「私は彼女が結婚しているかあるいは結婚していないかということは知らない」ということになるはずである。この最後の部分の **or not** は、実

際には訳されずに、上記のような訳になったのである。

それと同じような発想で、「～ですよ、それともそうじゃない？」という説明が生まれたものと筆者は考えている。そうすると、相手に選ばせるから、そこに軽い疑問や念押しの気持ちが宿るのであるという論理の展開を見せているのである。

今までにない斬新な発想の、ネイティブスピーカーとコラボをしながらの興味深い説明であるが、筆者は次の3点において不適切だと考えている。

1、「軽い疑問」と「念押しの気持ち」（上述においては、「同意を求めるキモチ」と言っていた）とでは、意味合いが全く違うということ。そのことに関しての説明が一切ない。

☞従来の参考書においては、軽い疑問には上昇調（↑）が使われ、「念押しの気持ち」には下降調（↓）が使われるというような説明がなされている。このようなイントネーションの違いによる意味の違いについての言及が全くないというのは、不適切である。ただし、ここで用いられている「軽い疑問」という言い方はあまり適切ではない。疑問には「軽い」も「重い」もないからである。ただし、ある事柄に対して、「大いに疑問を持つかあるいは多少疑問を持つか」ということはありうる。慎重に言葉を選ぶべきである。それこそ、少し言葉を軽く扱い過ぎているように筆者には感じられる。今までの本にはない、説明が非常に斬新で、興味深いものであるだけに、非常に残念である。

2、付加疑問文のイントネーションには、下降調（↓）と上昇調（↑）の2種類があるが、そのことに対する言及が一切ないということ。ラジオの英会話番組であるので、音声学の成果をある程度取り入れた説明がなされてもいいはずである。実際のコミュニケーションの場面においては、下降調（↓）を用いるかあるいは上昇調（↑）を用いるかによって、意味合いが違ってくるということであれば、この違いの説明をしないわけにはいかないのである。別に、音声学について、アカデミックに説明する必要はさらさらない。どの参考書にも書いてあるような説明で十分である。3人の講師の方がそのことを知らないはずはないので、どうして説明なさらぬのか全くもって理解に苦しむ。せつかく、ネイティブスピーカーと共同で活動なされているのであるから、是非説明が聞きたいものである。上述のような、筆者の「語用論的幅」という考え方についてもコメントが頂けると大変有難いと思っている。

大変興味深いことに、上述の付加疑問文に対するイントネーションを放送中に聴いていると、ネイティブスピーカーの方の読み方が2通りであることがわかった。つまり、最初は下降調（↓）で発音され、2度目は上昇調（↑）で発音されていた。

このことは、筆者が先程から繰り返し主張している「語用論的幅」という考え方を適用すると、妥当な説明ができるものと思われる。But it's a really important test, isn't it?（でもそれは本当に重要なテストなのでしょう？）という文であるから、（↓）も（↑）も両方使われる可能性があり、どちらを用いても非常に小さな差異でしかない（限りなく同じに近い）ということになるであろう。

強いて違いを表わすとすれば、「一抹の不安」という気持ちが入るか入らないかということになるであろう。それによって、些細な違いにも敏感に反応して、下降調（↓）と上昇調（↑）を使い分けるということを無意識のうちにネイティブスピーカーはおこなっているのかもしれない。もしそのことが真実だとすると、「語用論的幅」という概念を用いて説明をすることによって、

ほとんど違いを意識せずに下降調 (v) と上昇調 (w) を使用する例が実際に相当数あるということが予測されるのであり、もう (ほぼ) 同じ意味合いであるという認識となるであろう。言葉で説明するのは、大変難しいことではあるが、前述の「過去形」と「現在完了形」の違いなども同じ考え方の説明が妥当である。

cf. I just finished my homework. vs. I have just finished my homework.

事実、このNHKラジオ英会話の中では、上述のような文が just を伴って両方の言い方 (過去形と現在完了形) でもって使用されていた。それだけ違いがほとんどないということを示唆していると言えそうである。

3、「肯定」＋「否定」あるいは「否定」＋「肯定」という組み合わせが原則ではあるが、付加疑問文にはその他の可能性もあるということが全く明記されていないこと。

アカデミックな観点から見てみると、実際の付加疑問文には4通りの組み合わせがあることが知られている。

その点については、後程述べることにする。

### 3. 1. 2 NHKラジオ英会話の総括

今までにしてきた議論を簡単にまとめると、次のようになる。メリットとデメリットを区別して示しておく。

#### ①メリット (merit) について

- ・ネイティブスピーカーも太鼓判の実際に役に立つ英語がたくさん学べるということ。
  - ・放送の時に、文法の説明だけでなく、いろいろな語句の用法やニュアンスの説明がなされていること (このようなことは、辞書や参考書を調べても一向にわからない)。大変有益な情報である。
  - ・金曜日の復習を扱うレッスン (lesson) では、リスニング (listening) の練習と、スピーキング (speaking) の練習が十分にできるようになっており、とても工夫の跡が見られる。
- 私見では、リスニングは多少やさしめである。しかし、スピーキングにおいては、使い方によっては、すぐに反応できるレベルにまで達することができれば、英検1級の受験にも対応できる能力が身につくものと確信している。大変優れた企画である。

#### ②デメリット (demerit) について

- ・少し言葉遣いを軽く扱い過ぎている面があるということ。「軽い疑問」と「念押しの気持ち」では内容がかなり違うということ。さらに、「軽い疑問」という言い方にも筆者は引っ掛かるところがある。
- ・アカデミックな観点からすると、付加疑問文には4通りの組み合わせがあるが、そのことには何も触れられてはいない。その原因としては、一つには、この番組は上級レベルの英会話番組ではないので、そのことを認識してはいても、敢えて触れないでおいたということが考えられる。二つ目の可能性としては、番組の講師たちがそもそもそのような知識 (認識) を持っていないということも考えられる。どちらが真実かは現在のところ不明である。
- ・特に残念なのは、たとえ基本的なことであっても、付加疑問文の下降調 (v) と上昇調 (w) の使い方の区別について、ネイティブスピーカーの意見を聞きながら、説明をしてもらいたかったということである。何か参考書などには書かれていないユニークな考え方が出てくる可能性もあるからである。

以上、筆者が考えているメリットとデメリットについて述べてきた。どのような物事にもメリ

ットとデメリットがあるのは、極自然なことである。このようなメリットとデメリットの両面を十分に考慮した上でも、ラジオ英会話は筆者にとってはなくてはならない存在であることだけは確かである。

#### 4. 実際の付加疑問文の用法

##### 4. 1 基本形と応用形

先に、アカデミックな観点から考えてみると、付加疑問文には4通りの組み合わせがあるということを述べた。その4つとは、「肯定形の平叙文+否定形の付加疑問」、「否定形の平叙文+肯定形の付加疑問」、「肯定形の平叙文+肯定形の付加疑問」、「否定形の平叙文+否定形の付加疑問」のことである。前者の2つは **polarity reversed** なタイプの付加疑問文と呼び、後者の2つは **polarity constant** なタイプの付加疑問文と呼んでいる。前者の2つに関しては、もうすでに説明が終わっているので、ここでは後者の2つに関して詳細に見ていくことにする。

##### 4. 2 2つの応用形について

以上のような基本的な用法に加えて、付加疑問文には次のような用法もある。

###### ① 肯定形の平叙文+肯定形の付加疑問

(恒常極性付加疑問文) **constant-polarity tag question**

上昇調で発音される。(a) 自分の推測に対する確認を求めることもあるが、(b) 相手の言葉に対する自分の反応(驚き・喜び・不信など)を音調で示すことが多い。

(a) You've taken the washing in, **have you?**

(洗濯物は取り込んだよね)

This is the last ferry, **is it?**

(これが最終のフェリーですよ)

(b) You've done that again, **have you?**

(またやったな [だめだなあ])

So she mistook your meaning entirely, **did she?**

(では彼女は君の真意をまったく誤解したのだね [おかしいなあ])

ここには、どういうわけか下降調で発音される例は載っていない。

###### ② 否定形の平叙文+否定形の付加疑問

(恒常極性付加疑問文) **constant-polarity tag question**

理論的には可能であるとして、一つの例を挙げている。

So you don't like my cooking, **don't you?**

(じゃあ、私の手料理では気に入らないと言うのね)

なお、ここではどのような音調が用いられるかについては、何も述べられていない。

—江川 1991<sup>3</sup>, p.453

念のため、同僚のネイティブ・スピーカー二人に①と②のような形式の付加疑問文について聞いてみたところ、大変興味深い回答を得た。

・アメリカ人(男性)の意見—①②のような形式の付加疑問文は使わない(おかしい)。

- ・カナダ人（女性）の意見－①②のような形式も普通に使う（別におかしくない、OKである）。

つまり、下の二つの文のどちらもOKである。

(a) You're a student, **aren't you?** (↗)

(b) You're a student, **are you?** (↖)

特に (b) の場合には、I guess. という気持になる。ということは、(b) の方が Are you a student? (↖) に近いかもしれない。付加疑問文 (**polarity constant**) の方は casual である。

要するに、同じネイティブスピーカーであっても、付加疑問文の意味の違い（ニュアンスの違い）などを尋ねると、多少なりとも考えた方（捉え方・認識の仕方）に相違が見られることが往々にしてあるということである。

私見では、研究書をいろいろと調べてみると、①と②のような形式も実際にあるので、後者の意見を支持する。

このような形式による意味のずれとイントネーションとの関係について、今後もさらに検討する必要があるであろう。

#### ◎ 今回の論文のキーポイント

上述した『NHK ラジオ英会話』の9月号に、次のような記述がある。

**「Ivy League schools are in the US, aren't they?**

(アイビーリーグはアメリカにあるのですよね?)

付加疑問文の形です。軽い疑問、念押しの形。ここでも「～ですよね?」と確認を going します。作り方は簡単。基となる文が肯定なら否定疑問、否定なら肯定疑問を加えます。

ここでは Ivy League schools are in the US と肯定文ですから、否定疑問 aren't they? をつけています。(ちなみに、この文のイントネーションは (↗) であった。)

付加疑問文で肯定・否定が入れ替わるのは、2つの選択肢を示して相手に選ばせるため。

この文では「アイビーリーグはアメリカにあります、それともそうじゃない?」とするところに、軽い疑問・念押しのキモチが宿るのです。」

－2020 NHK ラジオ英会話 9月号 p.47

これは非常に重要な指摘である (cf. p. 9 NHK ラジオ英会話 12月号 pp. 26-7.) 筆者の知る限り、2か所に同じ趣旨の説明が載っていた。筆者は今までにこのような説明の仕方がなされているのを見たことがなかったのである。この説明では、付加疑問文の基本形についてだけになっているが、この考え方を2つの応用形に当てはめて考えてみよう。

上述の説明においては、「アイビーリーグはアメリカにあります、それともそうじゃない?」という部分が特に重要である。

この考え方をさらに推し進めていくと、次のようになる。

前に載せた2つの例文に再登場してもらおう。

- ・ **You've done that again, have you?**

(またやったな[だめだなあ])

ここでは両方とも肯定形なので、「君はそのことをまたやってしまった、そうだろう?」

くらしいの意味になる。ここでは (↗) のようである。

・ **So you don't like my cooking, don't you?**

(じゃあ、私の手料理では気に入らないというのかね。)

この例には、音調が示されていない。

この例においても、「じゃあ、君は私の手料理が気に入らないんだ。気に入らないんだろう？」ということになる。

この2つの例は、相手の言葉に対する自分の反応(驚き・喜び・不信など)を音調で示すことが多いとのことである。

このような解釈になるに至ったのは、『NHK ラジオ英会話』の説明を受けて、熟慮した結果の当然の帰結である。

つまり、付加疑問文において、肯定・否定が入れ替わるのは、2つの選択肢を示して相手に選ばせるためとあったが、この2例では最初の肯定(否定)形をまた繰り返すことによって、さらに意味を強める働きをしていると考えられる。

つまり、大西の言う「選択肢」がなくなり(cf. p. 9 と p. 13)、「肯定+肯定」、「否定+否定」ということで、「一方通行」になるということである。「～である、そうでしょう？」のようになるので、当然意味が強くなるわけである。

さらに、文によっては、感情的になったり、意味を強めたりする効果が出てくるのは、当然のことながら、文脈上の効果(語用論上の効果)があるからである。

従って、筆者が従来から主張しているように、「語用論的幅」という考え方と、今回主張している「肯定+肯定」や「否定+否定」のような「恒常極性付加疑問文」に対する考え方を組み合わせると、「付加疑問文」の全体像がより鮮明になってくるものと思われる。

実際に出てくる「頻度」ということでは、「肯定+否定」と「否定+肯定」の「反転極性付加疑問文」の数が圧倒的に多い。

「恒常性付加疑問文」の中では、「肯定+肯定」の例がいくつか見いだされる。一方、「否定+否定」の例は、理論上は可能ではあるが、ほとんど例がないようである。

いずれにせよ、今回取り上げた2つの応用形「肯定+肯定」と「否定+否定」という「恒常極性付加疑問文」については、さらなる研究が必要である。

#### 4. 3 応用形に対する吉田(1995, pp.31-2)の考え方

ここで吉田の考え方(一部、表記を改めている)を紹介しておくことにする。

「次の(1a)のように主節が肯定なら肯定で、(1b)のように主節が否定なら否定で受ける付加疑問文がある。

(1) a. *So you're getting married, are you? How nice!* (で、結婚なさるわけね。まあすてき!)

b. *So you don't like my cooking, don't you?* (で、私の料理がお嫌いってわけね)

この付加疑問文の機能は、聞き手が行なった陳述に対する話し手の興味・関心・驚き・怒りといった感情を表すのであるが、いずれの感情を表すかは、言うまでもなく、intonation で決ま

る。

例えば、(1a) は上昇調 (rising intonation) で発音されて強い関心を表し、(1b) は下降調で発音されて怒りを表している。

特に、否定の付加疑問文は (1b) のように攻撃的に響くので注意が肝要である。

(1) に見られるような付加疑問文は、相手の話を関心をもって聞いていることを表す返答疑問文 (reply question) と機能的にパラレルな関係にあると言ってよい。

(2) a. A: John *likes* that girl next door. (ジョンは隣のあの少女(こ)が好きなのよ)

B: Oh, *does* he? (ああ、そう)

b. A: It *wasn't* a good movie. (たいしていい映画ではなかったよ)

B: *Wasn't* it? That's a pity. (ああ、そう。残念だったね)

一般的に、付加疑問文の機能は、話し手が聞き手に自分の陳述内容に関して確認を求めることである。そういうところから、日本の英語教育界における付加疑問文に対する伝統的な訳は「～(です)ね」となっている。

しかし、「～(です)ね」と付加疑問文の表す発話力にかなりの違いがあることに注意する必要がある。私たちの日本語は、特に口語では、断定的口調を極端に嫌い、「～ね、～よ、～ですが」などを文末につけて口調を柔らげることを好む言語である。従って、英語では当然断定文で述べるところを、例えば、(2b) の日本語訳のように「～ね」をつけるのである。英語の付加疑問文に対応する日本語の典型的な表現は「... そうじゃない(ですか)？」であると思われる。

これに対し、英語の付加疑問文は、もちろん最終的確認を聞き手に求めるという本来の機能を保持しているものの、しばしば、話し手の意図を聞き手に強引に分からせる、反語的性格を持ち、場合によっては詰問調にさえ響くことがある。特に、下降調で発音された場合にこの傾向が見られる。

例えば、部屋を掃除すると言った子供に、まだ掃除が済んでいないところを見て母親が文句を言うような時である。

(3) You said you would clean the room, didn't you? と書かれている。

今まで筆者が考察してきたような意味論的考察に加えて、ここでは付加疑問文の表す「発話力」が問題として取り上げられている。当然のことながら、語用論的考察が必要不可欠である。つまり、付加疑問文の日本語訳 (... そうじゃない(ですか)?) を考えた時に、吉田 (1995) の言う発話の力と筆者の言う確信がある●と中立的な●の中間的な位置付けとが一致していると言えるであろう。ここでは、これ入れ以上深入りはしないが、この点を十分に考慮に入れて、さらにイントネーションも合わせて検討すると将来的にもっと面白い結果が出てくるかもしれない。今後の研究成果が期待される。

最後に、一つ重要な指摘をしておく。

「肯定+肯定」および「否定+否定」のような **polarity constant** なタイプの付加疑問文は、「肯定+否定」および「否定+肯定」のような **polarity reversed** なタイプの付加疑問文よりも感情的な側面がより強く現れるということを上で述べた。その意味するところは何かと言うと、このような文法形式(構文)がそのようなニュアンスの違い(意味のずれ)、用法上の相違を表す根本的な要因となっているということである。(つまり、一言で言うならば、**polarity constant** で付加疑問文を用いれば、自ずと **polarity reversed** で付加疑問文を用いる場合と比べて、何らかの意味でより感情的なニュアンスを伴った発話になるということである)。より感情的な発話をするには、より高いピッチ(例えば、上昇調)で言えば実現されるが、それは二次的なことで

ある。

その根本的な形式の違いによって生み出されて、意味のずれが生じた付加疑問文に、本来文法形式とは独立して機能すると考えられるイントネーションがさらに加味されることによって、語用論上さまざまな意味合いが context 次第で生じてくるということであると思われる。

上でも少し言及したが、実際のコミュニケーションの場において、どのような意味合いで付加疑問文が使用されるか（その守備範囲の広さおよび違いを日本語の「... そうじゃない（ですか）？」と比較してみることは、今後取り組むべき重要な課題となるであろう。

以上のような説明からもわかるように、付加疑問文という文法形式にイントネーションを加味した用法の説明がすっきりとした形でなされているとは言い難い。今後さらなる研究が必要である。

## 5. 結論および今後の課題

付加疑問文の基本的な考え方からは意味が少しズレた使い方、つまり、語用論的幅がある用法について主に考察してきた（今回新たに導入した考え方である）。

実際のコミュニケーションの場においては、英文に対する「意味論的側面」ばかりではなく、「語用論的側面」の重要性が改めて確認されたということである。

最後に、大西・マクベイ（2011, p.521）に大変興味深い記述があるので紹介しておくことにする。

### 「 ●無敵の付加疑問 innit?

みなさんがイギリスに行くときすぐに気がつく付加疑問の形があります。それが innit?。これは isn't it? がなまったもの。innit? は、イギリス英語では付加疑問文の帝王なんですよ。

(1) It's fine, innit? (晴れてるね?)

という形ばかりではなく、文法規則を無視した、

(2) You love me more than her, innit?

(あなたは彼女より私が好き、そうよね?)

なんて形を使う人すらいます。まあここまでくると「おいおい、innit (isn't it) じゃなくて don't you だろが」と、眉をしかめる人もいそうですが、気が向いたら使ってみてください。「日本人がなんでこんな表現を！」って感動されること請け合いだから。一杯奢ってくれるかもしれないよ。はは。」

以上のように、書かれている。

このことは、大変重要な意味を持っている。

今までの説明からもわかるように、英語という言語においては、付加疑問文という文法項目は、非常に体系的 (systematic) に機能しているということである。「肯定形」と「否定形」の組み合わせによって、合計4通りの表現形式があるということがわかったのである。それに対して、例えば、ドイツ語とフランス語は、全く異なった形を採用している。両言語とも、英語のような体系的な付加疑問文という形式はなく、それぞれ前者には「~oder?」, 「~ nicht wahr?」, 「~ richtig?」 という3つの表現形式 (イディオムのようなもの) があり、後者には「~n'est pas?」 という1つの表現形式がある。従って、上述の innit? は、ドイツ語やフランス語の表現形式 (イディオム) と同様に、文法規則を無視して、何がきても innit? を付け加えればよいということ



になる。非常に単純化の方向に向かうので、学習者としては大歓迎である。ただし、どこまで一般的に受け入れられているのか？ということや、今まで付加疑問文を *systematic* に学習してきた英語学習者が本当に *innit?* だけを用いていけばそれでよいのか、ということに関しては慎重に考えないといけない。使用者としては、*~innit?* だけを用いたとしても何とかコミュニケーションは成立するかもしれないが、実際の場面において *systematic* な付加疑問文を使用している際には、その用法にも慣れておく必要があるからである。

なお、付加疑問文の用法とイントネーションについて総括的に考察した論考として、伊関 (2013b) があるので参照されたい。

それから、英語とドイツ語およびフランス語の比較に関しては、伊関 (2019) に詳しいので、是非参照されたい。

今後はさらに、付加疑問文だけではなく、さまざまな構文に関して、語用論的にどのような使い方が実際のコミュニケーションの場面で可能であるのか、詳細に検討していくことが必要不可欠であろうと思われる。

## 参 考 文 献

- 江川泰一郎 (1991<sup>3</sup>) 『英文法解説』東京：金子書房。
- 伊関敏之 (2013) 「形式と意味のずれ (その1) 付加疑問文の場合—イントネーションに焦点を当てて—」 学術論文集『英語音声学』第18号, 323-35.
- \_\_\_\_\_. (2017) (編著) 『英語音声の研究と教育—多様な教育現場からの報告—』叢書 比較・応用音声学シリーズ第1巻. 愛知：日本英語音声学会.
- \_\_\_\_\_. (2019) (編著) 『英語音声研究の諸相—多様なアプローチによる研究と教育—』叢書 比較・応用音声学シリーズ第3巻. 愛知：日本英語音声学会.
- \_\_\_\_\_. (2020) (編著) 『言語音声研究の諸相—研究と教育に対する多様なアプローチ—』叢書 言語音声学シリーズ第1巻. 北見：日本言語音声学会.
- Linse Caroline, Jack C. Richards and Kerry O'Sullivan (2007) *Tune In 1 Learning English Through Listening*. Oxford: Oxford University Press.
- 日本放送協会・NHK出版 (編) (2018) 『NHKラジオ英会話4月号・9月号』東京：NHK出版.
- \_\_\_\_\_. (2019) 『NHKラジオ英会話12月号』東京：NHK出版.
- \_\_\_\_\_. (2020) 『NHKラジオ英会話9月号』東京：NHK出版.
- 大西泰斗／ポール・マクベイ (2011) 『一億人の英文法』東京：東進ブックス.
- 佐藤誠司 (2006) 『GRAMMAR CLINIC 5分間 基本英文法』東京：南雲堂.
- 安田一郎 (1970) 『NHK続基礎英語 英語の文型と文法』東京：日本放送出版協会.
- 吉田正治 (1995) 『英語教師のための英文法』東京：研究社出版.